

[ヨルダン川西岸・ラマッラーでの事業]

心理サポート

前号では、ジェニンでの親と子の心理サポート事業の成果を報告しましたが、今号では、ラマッラーに移った今年の事業について紹介します。2007年に、ラマッラー市と地区内11の村で開始し、2008年からは、外務省の「日本NGO連携無償資金協力」を得て継続中です。



ラマッラー地域はどんなところか

中心都市のラマッラー市は議長府が置かれるなど自治政府の中心地として、街は大きくなり人口も増え、経済活動も盛んになっています。しかし周りの村は山がちのために、オリーブやぶどうなどの果樹以外には目立った農業もできず、住民はラマッラーの役所や会社、イスラエルや周辺のユダヤ人入植地に働きに行くしか収入の道はありません。しかしここ数年は隔離壁の建設もあって、イスラエルや入植地への出稼ぎ労働が難しくなり、職のない人が増えています。町と村の格差は拡大するばかりで、村人たちはラマッラー市にさえほとんど出かけません。

地域の抱える問題

数年前までは、頻りにイスラエルの軍事侵攻があり、道路封鎖なども多かったのですが、隔離壁建設が進んだ最近、軍事侵攻が限定的になっています。しかし道路が遮断されて迂回路を通らなければならない、

移動にこれまでより多くの時間がかかるようになりました。長引く封鎖、失業、自治政府の問題（二つの政府、腐敗汚職等）など、経済や社会状況は悪化する一方で、ストレスの原因は減ってはいません。

パレスチナ人は大家族で互いに支えあう生活をしてきましたが、最近核家族化が進み、さらに経済・社会状況の悪化で、支えあう余裕がなくなってきました。こうした家族のつながりが薄れた結果、コミュニティの力が弱まっていて、犯罪も増えてきました。

人材育成の研修

さまざまなストレスがある一方、専門家は町にしかおらず診療も高価なので、心理的な問題を抱えた村の人たちにとってはまさに高嶺の花です。そのため村の中である程度の心理サポートが出来る状況を作り出すことが必要で、この事業では心理サポートを担う人材養成を目指しています。その人材として考えているのは幼稚園の先生と母親です。

アルーラ村で

この事業では、幼稚園の先生を対象にしたリーダー研修と母親を中心としたサブリーダー研修を実施しています。リーダー研修は、村から先生たちが来てラマッラー市で行われていますが、サブリーダー研修は、11の村（13幼稚園）にトレーナー

が出向いて、村の幼稚園に母親たちを集めて行っています。この村での研修の様子をご紹介します。

アルーラ村はラマッラー市から北に直線距離で約15km、人口約3,000人の中規模の村です。伝統的にオリーブ栽培を主産業としてきましたが、年々水不足が深刻化しているこ



・はラマッラーの2008年の実施場所

子どもに身近な人たちの心理状態を安定させ、相互に支えあうことができる、村の中での親子や家族の問題に近づくことができるからです。若い母親たちが多く集まる機会を自然に作れる幼稚園がその中心です。保守的・閉鎖的な村では女性が外出することが減多にないので、その機会を作ることもとても大切だからです。また幼稚園は読み書きを教えるだけの場所とされ、先生の社会的地位も待遇も低い状態に置かれていますから、先生たちをリーダーとして養成することは幼児教育を変え、村を変えていく契機にもなります。

とと、封鎖によって収穫したオリーブを出荷するのが難しくなっていることから、今は多くの人が農業をやめラマッラー市に働きに行っています。会社や商店などが主ですが、建設現場の労働者も多いそうです。

この日はアルーラ村の二つの幼稚園と、隣のデール・スーダーン村でも研修を行うので、トレーナー3人



と一緒にラムッラーから車で村へ向かいました。状況が落ち着いた日だったので、30分ほどで幼稚園に着きました。開始時間より早く到着した時、すでに4、5人の母親が来ていました。出席者14人中、半数以上が20代の若い母親ですが、みな3人以上の子どもがいます。16、17歳で、ナブルスなど離れた地域から嫁いできた人が半数です。

最近悲しかったこと

トレーナーのラナが研修の流れを説明します。「これまで心理的ショックについて、大人の抱える心理的ストレスについて話し合ってきました。今日のテーマは子どもの心理的ストレスについてです。子どもが抱える心理的ストレスを見つけ出す方法を実習し、次に子どもが心理的ショックを受けたときに見せる兆候について、グループで話し合います。」

全員に紙3枚が配られ、色鉛筆が用意されました。「3枚の紙それぞれに、絵を描いてもらいます。1枚目は最近自分が笑ったことまたは喜んだことを描いてください。2枚目は自分が怒ったこと、3枚目は自分が泣いたことです。絵にしてください。」

「絵を描いたことがないから、どうやって描いたらいいかわからない。難しすぎる」という母親もいました。どうやって描くかを隣の母親と相談する人もいましたが、ラナは「自分のことを描くのだから、人に相談しないで」と注意します。描き終わると絵を前に貼って、泣いたこと、怒ったこと、笑ったことの順に、何を描いたか一人ずつ説明します。「私が泣いたのは、ガザでの暴力的な内部対立です。ガザには行ったことはないけれど、連日テレビでガザの様子が流れていて、あまりの酷さに泣きました。パレスチナ人同士で衝突するなんて悲しすぎる。」
「兄がサウジアラビアに出稼ぎに行ったとき泣きました。」
「私が泣いたのは、頑張って料理を作ったのに、夫に違うものが食べた

いと言われたこと。」

「子どもが言うことを聞かないときに怒ります。勉強しないで遊んでばかりです」

「私が怒ったのは夫です。夫は警察官ですが、いつも仕事優先で、子どものことを気にかけません。」

「娘に怒っています。家族でピクニックに行ったとき一人で離れていってしまい、お弁当のときですら、家族と一緒に座らなかつたのです。」

「子どもから「お母さんに」とプレゼントをもらったときには何もいえないくらい嬉しかったです。」

「夫が子どもと一緒に遊んで夫も子どもも喜んでいました」

「欲しかったものを買ったことが嬉しかった。」

気持ちを共有する

みな顔きあっていました。発表が終わると、ラナが話します。「描いてみると、自分の感情が整理されます。また、描いたものから自分の中にあるストレスの原因が見えてくることもあります。絵で表現するので、文字がかけなくても大丈夫です。子どもにもできます。文章で書いてはいけないと言ったのは、そのためです。読み書きが苦手な子どもでも、自分の心を表現できますし、描いたものから子どもの状態を知ることが出来ます。」描くのは難しいといていた母親も「確かに、子どもに絵で表現してもらおうのは良いアイデアね」と納得していました。

続いては、子どもがストレスを抱えているときの兆候について、2つのグループで話し合いました。それぞれが自分の子どもの例をあげて、共通する特徴を探します。グループで話し終わると、話し合った内容について、全員でディスカッションをしました。子どもがストレスを抱えているときは「言う事を聞かなくなる」「兄弟を叩く」「頑固になる」「わがままを言う」などの特徴があげられました。

子どもが言う事を聞かなかつたり、口答えされると「ものすごく緊張してしまい、すぐに子どもを叩い

てしまう」と言った若い母親が2人いました。ラナが「叩いても子どもの態度は直らないでしょう」というと、2人とも「そうなんです。子どもはもっと頑固になり、それで自分もさらに神経質になります」と言います。「誰かに話してみたことは？」と聞くと、「他の地域から嫁いできているので、自分の母親や姉妹には普段会って相談できないし、姑に相談するのは緊張する」とのことでした。子どもを叩いてしまうこと、相談相手に困ることなどに始まり、離れた地域から嫁いできた人の悩みや姑との関係や親戚付き合いについてまで、ラナと他の母親たちも交えて、活発な議論が交わされました。

楽しい時間

研修が終わると、3人の母親からパンやケーキの差し入れがあり、みんなでお茶を飲みながら最近の様子や子どものこと、料理のことなど何でも話します。母親たちはこの時間を楽しみにしています。研修について聞いてみると「ここに来るとみんなに相談が出来て良いです」「研修で教わったことを自分の子どもに試すと、いつも良い結果が出ます」と、研修内容が早速、役立っている様子でした。

研修からの帰りも、トレーナーたちと一緒にです。車の中で、みんな自分の担当している幼稚園がどうだったか情報交換を始めました。この日、アルーラ村のもう一つの幼稚園でも同じように、活発な議論が交わされたそうですが、デール・スーダーン村は非常に保守的なこともあり、参加者に自分の意見を出させて話し合いに持っていくまでに苦労したとのことでした。